

伊豆料理組合飲食店 事件簿

9

料磨・鰯のなめろう井〈前編〉

岡崎大五

主な登場人物



焼家の大吉組合長



新米刑事・新庄 誠



むさしの真理子



美松の幹夫



一品香の慎ちゃん



賀楽太のかよちゃん



土佐屋のよっちゃん



なみなみのトンちゃん



料磨のオサム

連載発行日 <毎月10日・25日更新・全11回>

- 2017.4.25 火 序 章 「むさし・天城そば」
- 2017.5.10 水 第1話 「美松寿司・黒船寿司（前編）」
- 2017.5.25 木 第2話 「美松寿司・黒船寿司（後編）」
- 2017.6.10 土 第3話 「一品香・天然塩ラーメン」
- 2017.6.25 日 第4話 「賀楽太・おまかせ」
- 2017.7.10 月 第5話 「土佐屋・カクテル龍馬（前編）」
- 2017.7.25 火 第6話 「土佐屋・カクテル龍馬（後編）」
- 2017.8.10 木 第7話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（前編）」
- 2017.8.25 金 第8話 「なみなみ・地金目鯛の串焼き（後編）」
- 2017.9.10 日 第9話 「料磨・^{アジ}鰯のなめろう丼（前編）」
- 2017.9.25 月 最終話 「料磨・^{アジ}鰯のなめろう丼（後編）」

第九話 「料磨・鰯のなめろう井（前編）」

鰯^{あじ}のなめろう井は、元は房総半島の漁師料理で、漁師が船上でまかないとして食べていたものらしい。陸から持参した生姜、葱、味噌を、包丁でたたいた鰯と混ぜ合わせて、さらにたたき、ご飯にかけて食べるのだ。

魚料理に定評がある『料磨^{りようま}』のなめろう井は、見た目は、焼く前のハンバーグがご飯につけているようだったが、食べると刺身らしい角のある歯ごたえが残り、抜群のうまさであった。

鰯が新鮮でなかったら、とてもこうはならないだろう。

「ちよつと残しておきなよ。まご茶漬けにして食べると、またうまいからさ」
紅色の調理服を着た店主のオサムが、カウンターの中で天ぷらを揚げ

ながら言ってくる。

オサムは、その昔帝国ホテルの名店『なだ万』で修行していたそうである。そのせいかどうか、料理の手さばきは、それは見事な速さで、天ぷらを揚げるそばで鰯をたたき、キンメの卵とじ丼を作り、魚を焼いていた。

「あとでお茶漬けにして食べるのよ」

カウンターの隣に座る真理子が、まご茶漬けの説明してくれる。

いよいよ「下田料理飲食店組合長傷害事件」も、佳境を迎えつつあった。五人の容疑者のうち、ただ一人残ったシロでない容疑者が目の前にいる。真理子としては、ランチの客が帰るころにでも切り出すつもりなのだろう。今はおいしそうに、遅めの昼食を楽しんでいた。

彼女も店はあったが、午後一時半には、パートの女性たちにまかせて抜

け出してきたのだ。

「はい、お茶、お待ち！」

オサムと同じ調理服を着た女房の千春が、お茶を持ってきて、井にかけてくれた。

店は、この千春と二人で切り盛りし、忙しい時には、東京帰りで芸者見習いをしている次女が手伝っている。

お茶をかけても、たたいた鰯はコリコリしていた。身の繊維質がきれいに残るのは、オサムの腕がいいからだ。お茶漬けのサラサラ感と相まって、これまたうまかった。

「で、また今日はどうしたんですか、真理子さん」

ようやく注文された料理のすべてを仕上げたようで、オサムが言った。



髪は長髪、サングラスをバンダナ代わりに頭にのせて、顔の前に髪が落ちないようにしている。耳にはピアス。細面で、町のアンちゃん風である。同じ和食の料理人でも、髪は短くこざっぱりとした、美松寿司の幹夫とは好対照だ。料理人というより、自由人に見えた。

「そろそろ生まれるんでしょう？」

真理子が切り出した。

「今日か明日かって、千春さんがソワソワもんですよ」

オサムは言つて、料理を運び終わつた千春を指差した。

「何よ、オサム君だって、居ても立ってもいられないくせに」

「だって、あれだ。孫が生まれりや、俺はじいちゃんになるんだぜ。ロン毛でピアスをしているのによ。鏡を見たって、じいちゃんじゃない。なのに、世間

ではじいちゃんだ。どの面さげて、孫に対面すりやあいんだよ。参ったな、もう」

「じいちゃんになるんなら、じんちゃんらしい勲章が欲しくない？」

真理子が呼び水を打つ。

「組合長のことですか。そりやそうですよ。こんなロン毛でピアスのじいちゃんでも、百二十軒を束ねる下田料理飲食店組合の組合長だ。ついに登りつめたんだぜって、生まれてくる孫に言つてやりたいですよ」

「で、組合長になったら、どうしたいのですか？」

新庄は、近ごろこのフレーズが、挨拶代わりの質問のようになっていた。

「こうしたい、ああしたいってのは、特にない。きんめ祭りもやるようになってきたしな」

「きんめ祭は、オサム君の発案だったのよ」

真理子が解説する。

俄然、オサムは胸を張った。

「まあね。それより組合長になれば、発言力が生まれる。世の中は、どんなにいい意見を言っても、立場がなければ通じない。だから俺が組合長になつたら、みんなの意見を吸い上げて、それを商工会や漁協やJA、それに旅館組合なんかにも上げて、できれば下田市長にも談判できるような体制にしたいのさ。官民がもつとこう円滑にさまざま事業に取り組まないで、今までみたいに自画自賛で終わっちゃう。これじゃあしょうがない。そうでしょう？　真理子さん」

「それはそうと、先週の土曜日の夜、あなた、何をしていたの？」

「お父ちゃんを闇討ちにしたやつ探しですね？　みんな、俺が犯人みたい
に言ってますけど」

「オサム君が一番やりそうだもんね」

千春が笑って言った。

「バツカ野郎！　俺、大吉さんのこと、お父ちゃんと呼んでいるくらいなん
すよ。これでも女性や目上に対する礼儀はわきまえているつもりですから」
「そう言えば、オサム君って、千春さんをはじめ、女性にもさん付けで呼ん
でいるよね」

「当たり前でしょ。女性を大事にしない男なんて、カッコ悪いだけでしょ」
「ちょ、ちよつと待ってください」

新庄が二人の間に割り込んだ。

「つまりオサムさんも、シロってことですか？」

「あの日は真夜中に、実家に帰っていた娘が急に産気づいて、下田ホスピタルまで車で送っていったんですから。朝まで病院のロビーにいましたよ。結局生まれませんでしたけど」

オサムは言うのと、調理台から木べらを取り出し、ヌンチャクのように回した。二つの木べらが紐で結ばれているのだ。

これが彼の凶器になると、真理子は読んだのだろうか、オサムのアリバイは完璧だった。

「じゃあ犯人は、誰なのよ？」

真理子は気が抜けたように言った。

「真理子さん、これではまるで、アガサ・クリスティー原作の名作ミステリ

「『そして誰もいなくなつた』じゃないですか。あの小説では、死んだ容疑者の中に犯人がいたんですけどね」

新庄はため息をつく。

「犯人がいないなんて、それもまた、妙な話だな」

オサムの回す木べらヌンチャクが、空を切つて音を立てる。

その時真理子の携帯が鳴った。

「あれっ？　アツコちゃんからだわ。もしもし、何？　それ、本当？　伊

豆急下田駅着十四時四十七分の踊り子号ね。こうなつたら、みんなを招集して成敗してやるわ。許せないでしょ、そんなやつ。あなたはとにかく、時間どおりに早苗さんを連れて駅に来てちょうだい。どうせ保の上司とやらが、またノコノコと現れるに決まっているんだから。この下田を甘く見

るなつて言うのよ。エツ？　あと三十分しかないって？　だつたらこうして
いられないじゃない」

真理子は携帯を切ると、やおらシャーロック帽をかぶった。

「オレオレ詐欺の犯人が、もうすぐ下田駅に到着するそうよ」

「エエツ？　そりや大変じゃないですか。すぐに捜査課を呼び出しましょ
う。アチャーツ！　そうだ、今日はみんな出払っているんだった。署長に電
話します」

「オサム君、車を出して。駅に行くわよ。みんなには一斉メールで呼びか
ける。武器を持参で来るようにとね。相手が相手だから、油断はならな
いわ」

「よし、行ってくるぜ！」

オサムが千春に言う、彼女は慌てた顔で、おさむに向かって手近にあつた塩をまく。

「……千春さん、なんか違うんじゃないのか」

「いいから、行つといで！」

新庄たちは、千春の声に急かされるように店を出た。オサムのワンボツクスカーに乗り込む。

駅は観光客でそこそこ混んでいた。

ほどなく亜希子と梓美あずみに伴われて、土屋早苗が現れた。二人の子供も一緒だ。

梓美の話では、早苗は何でも昨夜、不安になって、孫の保の携帯に電話をかけた。すると今度は五百万円どうしても必要だと言われた。さす

がに早苗も不審に思い、小田原に来てほしいと言われたので、白内障の診察があるから、下田に来てほしいと頼んだ。その話を、お昼過ぎに訪れた梓美に話し、彼女が亜希子を呼んで再確認したというわけなのである。

「早苗さん、保君の上司を名乗る男の顔、覚えていますよね？」

ホームが見えるガラスで仕切られた待合室に入ると、真理子が聞いた。

「電話で話した時は、恐くなったけど、梓美ちゃんが来てくれて、それにこんなにもみなさんが集まってくれて。ここならガラスがあるし、もう恐くないです。犯人が来たらわかります」

早苗は言って、唇を噛んだ。

しばらくすると、一品香いっぴんこうの慎一がまず現れ、美松寿司の幹夫、なみなみのトンちゃん、土佐屋のよっちゃん、賀楽太がらくたのかよちゃん、美松寿司で顔

を合わせた会計士の佐野まで駆けつけた。

佐野を早苗保護の責任者に据え、残る面々はそれぞれ武器を忍ばせ、ホームに向かった。本来なら入場料がいるはずだが、真理子が顔パスで済ませる。

新庄は、なかなか署長に連絡が取れないことにヤキモキしていた。なんでもこの日は下田市長との会食で、まだ署に戻っていないというのだ。
いっぺいそつ
一兵卒の新米刑事が署長の携帯番号を知る由もなく、事の重大さを伝えるだけで手間取った。

ようやく署長のほうから、新庄の携帯に電話が入った。

「まもなく一番線に列車が参ります。黄色い線の内側までお下がりくだ

えい」

ホームにアナウンスが轟いた。

「いよいよ犯人のお出ましょ」と真理子の表情が引き吊っている。

下田料飲組合の七人が、線路のどんつきに建つ、アニメ顔の坂本龍馬の石像の前に集結した。

険しい顔で、それぞれのポーズをつける七人は、まるで必殺仕事人風であつた。（続く）

事件簿 MAP

事件簿は  マークのお店で
お求めいただけます。



この物語はフィクションですが、各店舗、店主、料理は
実在します。ぜひ一度お越し下さい。



岡崎大五

プロフィール

1962年愛知県生まれ。作家。
2003年より下田市在住。下田市観光大使。ベストセラーの『添乗員騒動記』（角川文庫）をはじめ、下田を舞台にした『生還の海』（徳間文庫）、『サバーイ・サバーイ』（講談社）など著作は40冊以上。
下田の人と自然をこよなく愛する、サーファーでもある。

連載「伊豆下田料理飲食店組合事件簿」はこちらでお求めいただけます。

スマホで読む 1話 ¥100



下田 100 事件簿



※アカウント登録・クレジット決済

冊子で読む 1話 ¥200

冊子版の設置場所

焼家／むさし／美松／料磨／一品香／土佐屋／開国厨房なみなみ・なかなか・ぼちぼち・ダイニングNAMINAMI／賀楽太／商工会議所／道の駅 まるごと下田館／村上書店本店・アネックス店・とうきゅう店／セブンイレブン下田柿崎店／地場や／ガーデンヴィラ白浜

定期購読

ご連絡いただければ下田街中・東本郷・西本郷は配達も承ります。
お問い合わせ／080-5297-6144（澤地） ※全10回（2,000円）分前払いとなります。

<協力店>

美松／料磨／一品香／開国厨房なみなみ／土佐屋／賀楽太／むさし／焼家



伊豆下田100景
shimoda100.com

200